

八木幹夫 プロフィール

1947年 神奈川県相模原市生れ

2022～23年（2年間） 日本現代詩人会会長

現在 詩歌文学館常任理事、神奈川近代文学館理事

丸山薫賞、産経新聞「朝の詩」選者を務める

詩集

『野菜畑のソクラテス』で現代詩花椿賞・芸術選奨

文部大臣新人賞受賞（1995年）

『夜が来るので』で現代ポイエーシス賞受賞（2008年）

評論

『余白の時間 辻征夫さんの思い出』

『渡し場にしやがむ女 詩人西脇順三郎の魅力』

訳本

『日本語で読むお経 仏典詩抄』

季語とは一体何か

八木幹夫

1 目には青葉山ほとどぎす初鰹 山口素堂

この句にはいくつ季語があるのか。よくよく見れば三つもある。五七五という最短形式の俳句の中で三つもあるのはもうほとんど句の状態を成さないかというところでもない。「目には」(青葉山ほとどぎす初鰹)山口素堂(江戸時代前期の俳人)。有名な一句が厳然とある。たしかに季重なりではあるが、あざやかな色彩と光、耳に聞こえてくるホトトギス、舌にはあの新鮮な鰹。

2 句会の喜び

作法は作法である。程よくはみ出ること、作者にも予想できない読み手の反応、意味のずれ。読み手、受取り手の解釈によって大きく膨らんだり、縮んだりするのが俳句の面白さ。作家小沢信男(2021年3月3日93歳没)さんは、「すべての文学活動は一つの運動体であり、この運動体は過去からの遺産を受け継いで成り立っている。いきなり一人の天才が運動体のある方向に流れさせるのではなく、集団的要素と個人の力が混ぜ合わさって動き出す。現代詩が狭い袋小路にはまり込み、個人の苦悩や近代的自我の覚醒などといっても、そこから抜け出すには他者の力を借りなければならぬのは必然だ。他者との対話が必要になってくる。」大岡信さんのいう「孤心」と「宴」とはそういうことなのです。

3 アルチュール・ランボー（1854～1891）の詩との出会い
自然な時間の流れを拒む。早熟の天才詩人アルチュール・ランボーの「また見つかった、何が、永遠が、海と溶け合う太陽が」（詩集「地獄の季節」小林秀雄訳）、このフレーズに私は18歳の時に出会って目眩めくような衝撃を受けました。ヴォワイアン（見者の手紙）では「詩人はあらゆる感覚の方法的攪乱によりへ未知へ到達すべきである」また「私とは一個の他者なのだ」と主張しました。

4 共感覚について

俗に共感覚といわれ、精神医学などでも取り上げられる。ある一つの刺激に対して通常感覚だけではなく、異なる種類の感覚も自動的に生じる知覚現象。表現としてのアルファベット表記の母音（A, E, I, U, O）にはそれぞれ自体に色彩や匂いがあるという感覚です。その例を紹介します。「黒いA、白いE、赤いI、緑のU、青いO、母音たちよ、ぼくはいつの日か、お前たちの秘められた誕生を語ろう。」（粟津則雄訳「ランボオ詩集」新潮社）

5 拙詩集『野菜畑のソクラテス』

さて、ここで私の詩作品について触れさせていただきます。この詩集は俳句に出会うことがなかったら、生まれることはなかったと思います。拙詩集は実は今まで喋ってきた、自然の時間、季節の言葉、季語を母体とするものを作品の骨格としています。文字通り季節の渦中に飛び込んでいくようなものです。俳句でいう季語を取り入れた詩作品です。

だいこん

なに 生き方を変えろだって
 ふざけんじゃねいやい
 こちとら ご先祖様代々
 ぴりっと からくて ぶかつこう
 ああ ぶかつこうで いいともよ
 そこのの 西洋かぶれのねえちゃんみてえに
 ハイヒールはいてよたよた歩く
 やわな あんよたあ
 どだい 根性がちがわあな
 泥がついててきたねえだと
 とつとと消えろ
 この すの入った大根役者

(詩集『野菜畑のソクラテス』「だいこん」)

らっきょう

愛されず冬の駱駝を見て帰る 赤帆
 砂の畑に風が舞い
 旅のらくだがゆきました
 らくだの背中で男はぽつり

「塩漬けのらっきょうが食いたいなあ」

月はだまって見てました

(同掲書「らっきょう」)

ふき

ちよいといっぽん

はいしゃくするぜ

雨は北斎 江戸の渡し場

浮き世草子の絵の中を

ざんざい

ざんざい

ふりしきる

はるは顔だす命の芽ぶき

臺のたつたる姐さんの

簾のうちの恋心

まだこぬ主さん どころおりやる

あちきは会いとうて

会いとうてならぬのええ

ほおっ

とんだ雨に出くわした

傘がねえので

落いっぽん

百姓衆にはすまねえが

だまって

かりてきちまった

濡れたいねえ

濡れたかねえやい

(同掲書「ふき」)

短歌ではこんな一首も書いています。

ちと一本拝借するぜ露の葉を傘に旦那は雨の花街

7 池田澄子さんの俳句

しかし俳人の中にもとても自由な発想のできる人がいるのだということを知りました。

ピーマン切って中を明るくしてあげた 池田澄子

(『空の庭』1988年)

日常の台所でピーマンの側にたって闇から解放するという発想は並ではありません。有名な

じゃんけんで負けて蛍に生まれたの 池田澄子(同上)

この一句にしても、蛍には過去の伝統的な短歌的抒情性が沁みついています。たとえば、和泉式部の「もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」(後拾遺和歌集より)の情念の深さが見え隠れします。「あなたはそっち。わたしはこっち」の世界にいるという輪廻転生の世界が平明さの中に浮きあがってくる。池田澄子の俳句には日常生活の何気なきの中の実実があります。そういうところが私は大好きです。さらに言えば、澄子俳句には季語に依存し、ぶら下がった面があまりないということも魅力ですね。そこはかたないユーモアも魅力の一つです。

どっちみち梅雨の道へ出る地下道 池田澄子

(『いつしか人に生まれて』1993年)

死んでいて月下や居なくなれぬ蛇 池田澄子

(句集『思ってます』2016年)

8 まとめ 土の匂いのする俳句と現代詩

私は現代詩も俳句も「土の匂い」がしなくなってきたことに危惧を感じています。観念が先走りし過ぎて抽象的な空中楼阁が出来上がってしまった。人間はいずれ土に帰っていく。この宿命を忘れてはいけない。大きなことわりの中でその時々には拒否と肯定を繰り返し、表現をする。歳時記という過去の財宝の箱を時々開けながら……。